

ネパールにおけるダリット差別の現状と FEDO訪問報告

友永 健三(部落解放・人権研究所理事)

今年の3月19日から27日まで、JICA(国際協力機構)の要請で、ネパールにおけるジェンダー主流化とダリット等の社会統合をめざしたプロジェクトが企画したセミナーと現地訪問に参加した。また、IMADRのメンバーであるFEDO(フェミニスト・ダリット協会)の事務所を訪問した。その様子を参考までに報告したい。なお、以下の報告は、あくまでも個人的な感想をまとめたものであることをお断りする。

〈セミナーで部落問題を報告〉

3月22日(月)カトマンドゥウのホテルエレレストで「ジェンダー主流化と社会的包摂政策セミナー：ネパール、日本その他の国における経験の交換」をテーマにしたセミナーが開催された。参加者は、政府関係者やNGO関係者100名程度であった。筆者から「日本の部落問題と社会的包摂」をテーマにパワーポイントを使って報告をおこなった。報告のポイントは、①部落問題の簡単な説明、②戦後の部落問題解決に向けた取り組みの概要、③部落解放運動の果たした役割、④自治体や国が果たした役割、⑤成果と課題である。時間をオーバーするのではないかと心配したが、与えられた50分(通訳含む)以内に終わることができた。報告が終わったときに大きな拍手があった。

私への質問は、①部落民は、外国からきたのか？②部落がおかれている状況を改善するために最も重要なことはなにであったのか？③部落の女性が置かれている実態は？の3点であった。①については「同一民族」、「同一人種」の中の過去の身分に起因する差別である、②については、部落内のリーダーの養成、青年と女性の立ち上がりである、③については、部落の中でも女性が置かれている実態はより困難な実態に置かれていること、部落の中でもDVがあるのでそれとの取り組みが必要であること、審議会等へ女性の代表を入れることが重要であることを回答した。

〈ペタリア村での交流〉

3月23日、10時40分にカトマンドゥウからプロペラ機で50分ほど南東に飛んで、11時半頃ピラトナガル空港に到着。ここから四輪駆動車で1時間ほど走り、12時20分に、ダリットの人びと先住民族が暮らすペタリア村に到着。

会場の入り口に歓迎の掲示があり、大勢の人びとが手に手に花束を持って歓迎してくれる。会場は、学校の教室を2つほど合わせたぐらいの大きさの平屋建ての子どもセンター

である。天井に備え付けられた2台の扇風機が回っている。

JICAの一行は、壇上に置かれていた椅子に座って会議が始まる。進行と通訳は、モラン郡での今回のプロジェクトを専従として担当する方である。JICAから参加した一行が自己紹介をし、地元の参加者全員の自己紹介がある。子どもセンターということもあって、子ども会のメンバーの参加が多い。

その後、ペタリア村の代表者から地域の概要の説明があり、質疑応答にうつる。その中で、この地域にはユニセフの支援があって子どもセンターができてきていること、また子ども会が組織されていることが分かる。女性がおかれている問題としては、やはり経済的に苦しいので、女性の仕事が欲しいとのことであった。ダリットについては、仕事が不安定で生活が貧しく、なかなか集会にも参加できない状況にあること、住環境が劣悪でトイレもないとのこと、ただ、ダリット出身の教員が1名いるとのことであった。なお、参加してくれた地元側の進行役をしてくれた男性はダリット出身とのことであった。

今回のプロジェクトの受け皿になる、この地域の委員会の構成を聞くと、女性5、ダリット3、後進階級2、ジャナジャッティ(先住民族)4、政党代表7ということで、政党代表の比重が多く、女性の比重が少ないことが分かった。これに対して参加者の女性からもこのような委員会が作られていることを知らなかったとの発言があり、JICAの代表からも女性の比重を少なくとも33%にしてみたいとの要請がある。これに対してペタリア村の代表者から今後そのようなよう努力したいとの回答がある。

1時間半ほど交流をして、会場を出たところにある店で焼きそばをご馳走になり、ペタリア村をあとにした。

〈ポカリア村での交流〉

3月23日は、ピラトナガルのホテルに泊まり、翌朝8時にホテルを出発。四輪駆動車で1時間あまり走り、9時10分にポカリア村に到着。ここでも地域の人びとが手に手に花を持って出迎えてくれる。

村役場で、自己紹介をする。地元の参加者の中に、マデシの政党、マオイスト、統一共産党などの政党関係者が多い。自己紹介だけにとどめ、早速地域の視察へ向かう。

村役場から少し行くと大きな池がある。そこから少し歩くと、最初にジャナジャッティの人びとが暮らす家が10軒ほどあり、次いでダリットの人びとが暮らす家が40軒ほど



ジェンダー主流化と社会的包摂政策セミナー(3月22日)



ペタリア村での交流・実態を訴える女性(3月23日)

並んでいる。ダリットのリーダーに、村の生活について話を聞く。仕事は小作か工場労働者で、収入が少なく生活が苦しいとのこと。40世帯ぐらいの地域に共同で使うポンプがわずか3台である。あと5台は欲しいとのこと。

道端で竹細工をしている人がいて写真を撮らせてもらう。やがて、ダリットのリーダーの家の前に到着する。リーダーの家は、駄菓子屋さんをしている。いつとはなしに10人ぐらいの女性と子どもが集まる。子どもの教育のことについて尋ねると、近くに小学校がないため中学校に小学生も通っているとのことである。学校に通っていない子どももいるとのことである。近くに小学校を建てる計画が固まっているとのことであった。11年まで学んだ青年がいて、地域の子どもの勉強を大きな木の下で見ているとのことであった。部落解放運動の初期の姿がある思いをした。その青年に、がんばって欲しいとの言葉をかけて、次の区域(ワードと呼ばれている。日本での「小字」にあたる)に行くと、そこは後進階級が住む地域だとのこと。

道路を左に曲がり少し行くと、別のダリットの集落があり、リーダーだという19歳の青年が挨拶をしてくれる。この青年は、11年を卒業しているが、そのダリットの地域では初めてだとのことである。もう少し行くと、竹とワラでつくった30人ぐらい入れる簡易な集会所に、女性が20人ほど集まって話を聞いている。近づいて行って聞いてみると、小口融資の勉強会をしているとのことであった。

おおよその状況がつかめたので、村役場に戻る。途中、病気を治すための「お呪い」をしてもらっている家に立ち寄る。この家は、少しお金を持っていると見えて屋根にパラソルアンテナが付いている。ちなみに、この村全体に電気は通じている。あとで気付いたことであるが、この地域の入り口に少ししっかりとした平屋の建物で診療所がある。この日は休みだとのことである。また、村役場の斜め向には、小さなヒンドゥー教のお寺もある。

村役場に戻り、地元のお菓子をご馳走になり、JICAの代表と私から、今回のプロジェクトを活用してこの地域の女性と社会的に排除された人びとの立ち上がりを訴えた。

〈セミナーと視察で感じたこと〉

3月24日に総括会議があったが、そこで筆者が発言したことは次のとおりである。

- 1, セミナーでの筆者の報告に対する感想を聞いて欲しい。「良かった」とのことであるが、なにが参考になったのか知りたい。
- 2, テタリアア村とポカリアア村を視察して、1950年代の部落解放運動が盛り上がり同和行政が開始される前の大阪の部落の実態に告示している。(住環境や教育の実態、リーダーや若い人女性の存在など)

- 3, ネパール人で地元と日常的にコンタクトをとれる人の役割が決定的に重要
- 4, 村で取り組みばおかれている実態を変えることができることを訴えていく必要がある。今回は、日本の全国レベルの報告をしたが、次回機会があれば、具体的な一つの部落が立ち上がり、おかれている実態を変えていったことの紹介をすることも重要だと思う。
- 5, それぞれの拠点の村毎に、獲得目標を定めていくことが必要

〈FEDO事務所を訪問〉

3月25日、カトマンドウのホテルにFEDO代表のドゥルガ・ソブさんが迎えにきてくれている。ドゥルガさんの車で事務所まで来て欲しいとのことで、通訳のチャンドラさんとともに伺う。

FEDOの事務所は、カトマンドウ市内の中心部にあり、自己紹介の後、会議室で7名のスタッフとともに懇談する。中には、大阪や奈良で部落解放同盟の女性と交流した経験を持つスタッフもおられる。

私からは、部落問題に関する資料渡し、ジュネーブでおこなった第5回執行委員会の報告をする。また、JICAのジェンダー主流化と社会的包摂プロジェクトの紹介をし、JICAネパール事務所と連携をとってみたいかどうかと提案する。

ドゥルガさんからは、ネパールにおけるダリットに対する差別の現状として、ある地方のダリットの人びとが「薬草」を取りに行っていたところ、軍人から発砲され3名が亡くなったという事件が3月はじめに起こっていて、抗議行動をしていることが紹介される。

また、FEDOは、1994年に創立され、カトマンドウに本部があるだけでなく、半分ほどの郡に支部組織を持っていること。女性の自立支援に取り組んでいて、カトマンドウで美容師の資格を取って美容院を開いたり化粧品を販売することに成功している。地方では、野菜の栽培などにも成功していることが紹介された。

財源としては、ネパール政府からは補助はなく、これまでは、アメリカの財団の支援をもらっていたが、近年EUからの支援をもらっているとのことであった。

役員は13人いて、5人が地方から、2人は、最も困難な状況に置かれている人びとから、6人は選挙で選ばれている。任期は4年である。総会は、毎年7月に開催しているとのことである。

記念撮影をして、来年5月、IMADRの理事会と総会が東京であるので、是非ドゥルガさんも参加してもらいたいとの依頼をして別れを告げた。(ともなが けんそう)